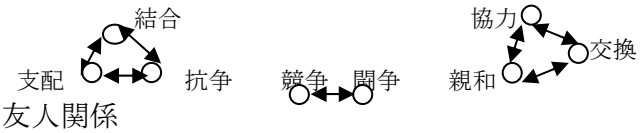
授業科目名：社会学理論（Principles of Sociology）教養学部　冬**学期**　金曜日３限[13:00-14:30]

第4回　2010年10月29日　授業の内容

★社会学の営みは、「身の回りに気づくこと」である。
自分と身の回りとのつながり、その関係のありように気づくこと。自分たちが毎日あたりまえに行う事、「普通である」としていたことを疑ってみること、その「あたりまえ」をあたりまえとしていたことに気づくことである。

★相転移の多様なパターンとその例



・友人関係
　友人関係は基本的に親和関係に見えるが、協力や交換の様々な要素が混合している。
　協力や交換に基づいた友達関係から親和の性格が大きい部分を占める恋人関係に発展することもありうる。＊恋人関係から友達関係になれるか？単純に言える問題ではないが、恋人としての関係が終わった後でも、つまり強力な親和関係が終わった後でも友達という形で付き合えるというのは、親和以外の要素からも、今後の協力や交換から得られるものが大きいというケースなどが考えられる。cf)場面ごとに転移するサークルメンバー、例えば部活の先輩と普段は結合関係だが、試合中は抗争の関係に転移するように、場面の変化によって関係が転移することもある。
・植民者/Natives
　支配関係において支配されていた人たちが法的手段を用いて補償を求め、抗争関係に転換する場合がある（支配⇔抗争）
　↓
　（結合）

<u>世の中を、支配や抗争関係より、結合を増やす方向に向かわせるためにどうすればいいのかを考える事も社会学の役割である。</u>

・多文化主義：現代は異なる文化を持つ集団を敵対視するのをやめて、対等な立場で共存しようとする多文化主義的な考え方に基づく議論や政策が重視される傾向にある。「東アジア共同体」構想も「多文化共生社会推進事業」の一つである。
・夫婦のDV（結合→支配）：結合関係の延長線でDVが起こるために、支配関係であることに気付けない場合が多い。友達関係においても結合→支配→抗争の転移が可能
・企業間の協力⇔競争：企業間はお互いの生存のために協力と競争の側面を両方持っている場合が多い
・民族紛争：異なる民族の間に起こる紛争のことで、 宗教、政治、経済、歴史的な様々な要因から抗争が生じる。複数民族間の対立だけでなく、元々同じ民族であったが見方をする組織の対立から抗争に発展した民族間の紛争も存在する（結合→抗争）。

★根本的に変わらない側面：時間の不可逆性と自由
小田島雄志曰く「シェイクスピアの悲劇のパターンには“It`s too late”と“I must go”の二つがある」。人間の根っこにある変わらないものとして、①時間の不可逆性と②自由がある。時間を止めたり、戻したりすることはできない。また、決められた事の中に人間を押し込むことなど出来ない。人間は自由を持っているため、いくら他人が「ああすればいいのに、ああすればずっと幸せでいられるのに…」などと思っても、本人には物足りないのである。そのような性質が人間の根本的な条件に根差しているため、上のような二つのパターンの悲劇が生じる。

★次回の内容：人間の社会の第一原理として機能主義ｖｓ葛藤理論